子どもの日（花の日）礼拝
礼拝６月１２日（日）
題　『子どもたちを抱き上げるイエス』
テキスト：マルコによる福音書１０章：１３～１６節

おはようございます。
今日は日本キリスト教団では、子どもの日（花の日）と定められています。
子どもたちの健やかな成長を願い、コロナ禍前までは洲本教会でもそれぞれお花を持ちよって礼拝を捧げ、礼拝後病床の方々にお花を届けていました。
　コロナ禍になり、お花を持ちよることはできていませんが、年に何回か礼拝参加者で寄せ書きをできたことは感謝でした
。
　神さまは、小さな者たちに慈しみの目を留め、心や身体の弱った人たちのことを思ってくださる方であることを思います。神の子イエスさまは、そのことを多くの出来事やたとえ話などでも教えてくださいました。
　今日の聖書の個所もイエスさまの優しい愛の姿が表れていることを思います。共にみ言葉に聞きたいと願います。
◆子供を祝福する
13:イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。
　ある時、人々がイエスに触れてもらうために子どもたちをイエスの元に連れてきました。ちなみに約 2000 年前.ユのダヤ社会では子どもは１２歳までだったようです。
　「イエスに触れていただくために、」ということは、親たちが多かったのかもしれません。古代では病気や戦や事故などで命をおとす子どもたちが、今よりずっと多かったと思われます。今日一日を生き延びるということも時には切実だったと思われます。今、戦いに苦しむウクライナの子どもたちのことを思います。
　ところでイエスの元に子ものたちを連れて来た人々は、子どもたちの命と成長を願い、イエスにさわってもらって祝福を祈って欲しいと思って連れて来たのだと思います。
　宣教・メッセージの準備の中で、讃美歌２１の３７１番、「このこどもたちが」を思い出していました。１節、２節の歌詞を読んでみます。
1.このこどもたちが　未来を信じ
　つらい世の中も　　希望にみちて
　生きるべきいのち　生きていくため

主よ、守りたまえ、
平和を、平和を

2.戦いあらそい　　ここにかしこに
地をとどろかして　燃えさかるとき
子らは泣き叫ぶ　　血を流しつつ
主よ、とどめたまえ、
いくさを、いくさを
　　自由で平和な世界となる日を切に祈ります。

さて今日の聖書の個所の場面では、
弟子たちは子どもたちをイエスの元に連れて来た人々を叱った、とあります。「こっちに来るな」ということです。拒絶の振る舞いです。
　これは、決してイエスの弟子たちが単に意地悪であるというのではなく、弟子たちも日々の働きで疲れていたことと思われます。そこに子どもたちを連れた人たちがやって来たのです。弟子たちの気持ちはいらついたのではないでしょうか。「自分たちは忙しいのだ。」こどもたちの声や動きに、「やかましい、うるさい。」と感じる弟子たちも中にはいたかもしれません。
「しばらくそっとしたい。」と思う弟子もいたことは想像できます。
ちなみに、２０００年前のユダヤでは、世界中そうであったのかもしれませんが、子どもは未発達で、社会の正式な構成員ではないとの見方が強かったようです。今日で言えば差別ですが、実は女性もそうみなされていたのです。組織のメンバーとして正式に数えられていなかったと言われています。現代では考えられないことです。人間の尊厳さを認める、人権意識が育ってない古代はもちろん、今でもそのような国や地域はあるのだと思えます。日本でも戦前まではそのような考えがあったのだと思えます。人の尊厳さや大切さよりも、組織や国の方が重要とされるのです。そのような中では、人間は時に国家の道具のようにみなされるのです。
天と地を創られた神さまは、一人ひとりの人間の尊厳さ
大切さを重視されるのです。
人間の尊厳さ、大切さは歴史の中で現代の人権尊重へとつながって来たのだと私は思っています。しかし、気をつけておかないと元に戻ってしまう危険性もあることを思います。

　さてここからです。

14:しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。
　イエスは、自分の弟子たちの態度、ふるまう姿を見て憤られます。
それはイエスさまにしては強い姿勢です。イエスは、自分の所に来る子どもたちや連れて来た大人を叱ったのです。弟子たちを怒られたのです。
ここで、イエスは弟子たちの一体何に怒られているのでしょうか？
皆様はどう思われますか？

　わたしは、*「配慮という名のエゴイズム」*ということを思わされました。
「配慮という名のエゴイズム」とは、この時、弟子たちは、イエスのことを思うという名の元に、自分たちの考えや思いの方を、イエスの思いや考え以上に、つまりイエス以上に第一としたのではないかということです。
　この時、弟子たちはもちろんのこと、イエス自身も疲れていたと思われます。弟子たちのイエスのことを配慮していたのだと思います。
しかし、イエスの心の深み、願い、祈りを分かっていなかったのだと思います。
それは神の子イエスが神によってこの世に派遣された意図についてです。
イエスは、自分の所に来る者はどんな人でも受け入れてくださるのです。
特にグループや社会で低く扱われている人をです。
　今、心細さの中に生き、イエスを頼りにして来る人を受け入れるそれが愛なる神さまの思いであり救いの計画だからです。
　聖書の放蕩息子のたとえを思い出します。自分の愚かさゆえに社会のどん底に落ち、ボロボロになった息子を来る日も来る日も、じっと待ちわびていた父親のようにです。自分の家に帰って来た息子を父は手を広げて迎え入れたのです。それが聖書に記された愛なる神さまなのです。

　わたしを含めて、わたしたち人間は弱い者で、目の前の人が自分にとって、または属している集団にとって、組織にとって、役に立つかどうかを判断の基準にして、その人との付き合い方を考え行動しやすいと思うのです。良い人とは一体どんな人のことでしょうか？　自分にとって良くしてくれる人が良い人と思ってしまっていることが多いのではないでしょうか。
聖書では、主イエスはきっぱりと弟子たちに言われました。
「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」と。
　ここに描かれている子どもとは、こどもの純粋さや、あいらしさ、かわいらしさというよりも、大人や何かに頼らなければ、生きていけない存在としての子どもの姿だと思うのです。もちろん子どもは、自分を受け入れてくれる人に

は近づいて行きます。正直だと思います。

神の国、永遠のいのち門もこのような人たちに開かれている。大きく開かれているのです。

15:はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」「はっきり」という言葉は「アーメン」という言葉が使われています。まさに主イエスの確信なのです。

１５節の言葉は、文法的には「子どもたちを受け入れる人でなければ、神の国に入ることはできない。」とも受けとめることができるとする最近の聖書研究者もいます。わたしには、イエスさまのこの世での生き方から見れば、「そうだな～」と思えるのです。一番古い時期にまとめられたイエスさまの姿を伝えているこのマルコによる福音書に記されたイエスさまは子どもに代表されるように、弱い人たち、心細く頼る者のない人たち、病気の人たち、仕事を失った人たちを大切にされる方だったのです。ここに真の愛があるのです。ちなみに子どもを受け入れるイエスさまのこの話は、マタイにもルカにも記されています。

また神の国は、わたしたち人間が自分の力、能力や地位や財産で手に入れることの出来るものではなく、神の国は、神さまから与えられる賜物であり、頂けるものなのです。小さなこどもをありのまま受け入れる人は必ず神の国に入るとの約束です。

「16:そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。」ここを読むとうれしくなります。

主イエスは子どもたちが自分の方に近づいて来るのを喜ばれたのです。

子どもでも、若くても年を重ねても、わたしたちもそのイエスとの交わりの喜びに、今からでも与ることはできるのです。主イエスはわたしたちを喜んでくださっているのです。わたしたちも「イエス我が喜び。」と告白するのです。

その時、きっとその場所には笑顔が咲き、麗しい花の香りがすることでしょう。

主の平安を祈ります。